赤川次郎さん 政治に怒る

8 月 9 日にもレポートしたが、中日新聞 8 月 29 日「特報」により、赤川次郎さんにもう一度、語ってもらおう。

赤川次郎さん 政治に怒る

言葉 ばかにするな

特報

「積極的平和」、70年談話の軽さ…

文芸誌も危機感

「流行作家」というイメージがあるが、社会派的な作品も少なくない。今年出版したエッセー集「三毛猫ホームズの遠視鏡」（岩波現代文庫）でも、安倍晋三政権を痛烈に批判する。

文芸誌「すばる」8 月号掲載の作家、高橋源一郎さんとの対談では「日本語がおかしいと思いませんか。積極的平和主義って何ですか。言葉をそこまでばかにしていいのかと腹が立ちますね」と発言した。その意味について、赤川さんは「積極的平和主義という言葉には『戦争』を『平和』と言い換える怖さがある。平和というのは、戦争がない状態ではない。言論の自由があり、自由に行動ができて、海外と外交で問題を解決できることが平和で、戦争をしていないから平和ではない。平和という言葉自体をよく考えないといけない」と語る。

安保関連法案をめぐる国会審議を見ていても言葉の機能不全が如実だという。「（現政権には）議論で相手を説得しようという気がない。そもそも議論をかみ合わせると、矛盾が出てくる。でも、それ以上に採決すれば通るんだ、手続きとして国会に出ているだけという印象を受ける」「民主主義をばかにする」（赤川さん）人たちが主導権を握れば、独裁的な政治が立ち現れるのは必然だ。言葉の軽さは与党政治家に端的に表れているが。国民的な現象であるようにも見える。赤川さんは、原因の一つとして、「あまりに早く浸透しすぎてしまったネット社会」を挙げる。そんなネット文化に慣れている若者の一部を「うまく利用している」のが、現政権ではないかとみる。

言葉の軽さは、首相の戦後 70 年談話にも感じたという。「結局、自分は謝りたくない。（談話は）長くて、修飾語がやたら多い。自分の気持ちを言っていないから、人の胸を打たない。たくさん並べれば、価値があるぐらいの発想。言葉の重みはこの程度なのか、とつくづく思った」

政治に対する発言はこれからも続けていく。それは「作家は進歩的であれというつもりはない。しかし、言葉をばかにされたら怒るべきだ」という職業倫理と強く結びついいる。

（2015年9月2日）